

論文要約

『メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する考古学的研究』

市川 彰

マヤ、テオティワカン、アステカなどの諸文明が栄えた文化史的領域を「メソアメリカ」といい、各地で大規模センターが興隆し、繁栄期を迎える紀元後 300～900 年ごろを「古典期」という。しかし、近年、古典期に先行する先古典期（紀元前 1800～紀元後 300 年）の社会の実態が明らかになるにつれて、両時期の区別が曖昧になってきていた。そこで本研究では、墓制研究による社会階層化の過程とその背景の解明、発掘調査と出土資料の分析を通じたメソアメリカ周縁社会の特質に関する研究を切り口として、メソアメリカ古典期社会の形成過程と特質について考古学的に論究することを目的としている。

本論文の構成と要約は以下の通りである。

序章「メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する研究の現状と課題」では、メソアメリカに関する基本的枠組みを概観した上で、メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する研究史と現在残されている課題を明確にし、課題解決のための本研究の視点と方法について述べている。現在残されている課題として、先古典期から古典期にかけての通時的視点に基づく、①社会階層化の過程とその背景の理解、さらに②周縁地域の社会変化の実態解明の必要性を指摘した。以下、この 2 つの研究課題に対応して、二部構成で議論を展開し、最後に終章を配し、まとめとしている。

「第 I 部 社会階層化からみたメソアメリカ古典期社会の形成過程」のはじまりである第 1 章「本研究の分析視点と方法」では、まず社会階層化の過程とその背景の解明に有効な手法である墓制研究について概述している。「墓への労働投下量」という視点に着目し、墓壇構造の複雑さ、副葬品の種類数の多寡、希少財の副葬割合という 3 つの基本属性の相関関係の通時的把握を中心にすすめ、さらに権力資源論や二重発展理論をデータ解釈のための緩やかな枠組みとして使用するという方法論・理論的枠組みを提示している。

第 2 章の「マヤ地域の社会階層化」では、マヤ地域の社会階層化の過程とその背景について検討している。マヤ南部地域、マヤ南東地域、ウスマシタ・パシオン川流域、ペテン・ベリーズ地域、ユカタン地域の 5 地域にわけて、それぞれ先古典期から古典期にかけての通時の研究が可能な 10 遺跡 1352 基の墓資料を中心に分析している。その結果、先古典期後期から終末期（紀元前 400～紀元後 300 年）には階層分化がすすみ、突出した権力を有した支配者層が出現するようにみえる。しかし、その権力基盤はイデオロギー的側面に偏向しているため盤石ではなく、明確な階層秩序とより堅固な複数の権力資源を有した

支配者層が出現するのは古典期前期以降（紀元後 300～600 年）であることが明らかとなった。とくに古典期前期以降には、埋葬属性間の相関関係から、階層間格差の二極化が生じ、さらその背景には、支配者層による希少財を独占する戦略と分配または所有を許可することによって権力を獲得しようとする戦略の違いがあることも明らかとなった。ただし、階層間格差が二極化するとはいえ、同一墓壇構造内でも差異が看取されることから、重層的な階層秩序の存在がうかがえる。最後に、これらの墓制研究から想定される社会階層化の過程の復元をもとに、①競合型、②外部依存型、③小地域在地指向型、④資源供給型という 4 つの異なるマヤ古典期社会の形成過程モデルを提示し、第 2 章のまとめとしている。

第 3 章の「オアハカ地域の社会階層化」では、オアハカ地域の社会階層化の過程とその背景について、オアハカ地域最大のセンターであるモンテ・アルバン遺跡の墓資料を中心として 18 遺跡 735 基を分析している。その結果、モンテ・アルバン II 期（紀元前 100～紀元後 200 年）には階層秩序が明瞭になってくると、続くモンテ・アルバン IIIa 期（紀元後 200～500 年）と IIIb 期（紀元後 500～750 年）には、階層間格差が二極化する状況がみられた。興味深いのは IIIa 期の二極化であり、石室墓に埋葬される集団と石棺墓に埋葬される集団による競合の結果であることが予想される点である。石棺墓に埋葬される集団がテオティワカンとの遠距離交易に積極的に関与し、経済的側面の操作を通じて社会内部の権力を獲得し、さらに強化していった。一方の石室墓に埋葬される集団は、石室墓内に壁画を製作しイデオロギー的側面の強化という異なる戦略をもって対応した姿が想定される。IIIb 期の階層間格差の二極化は、イデオロギー操作に成功した石室墓に埋葬された集団が突出し、テオティワカンの衰退にともなって石棺墓に埋葬された集団も弱体化していくことが明らかとなった。また、マヤ地域同様に階層間格差が二極化するとはいえ、同一墓壇構造内にも副葬品や希少財の種類数の差が存在することから、重層的な階層秩序が存在していたことが想定されることとなった。

第 4 章「メキシコ中央高原の社会階層化」では、メキシコ中央高原の社会階層化の過程とその背景について、メソアメリカ最大の都市国家であったテオティワカン遺跡の 594 基の墓資料を中心に検討している。土壇墓を主体とするテオティワカンでは地区ごとの通時的な変化に着目し、地区間・地区内の社会階層化の過程とその背景について考察している。通時的にマヤ地域やオアハカ地域でみられたような突出した量の副葬品や希少財を有する厚葬墓は存在しないことから、明瞭な縦の階層秩序は捉えにくく、むしろ様々な職業や地区によって有力者が存在するような多頭的階層構造をみいだしている。トラミミロルパ期（紀元後 200～350 年）ごろから墓制に差異が表出し、地区間・地区内でも集団間の差異化が図られるが、ショラルパン期（紀元後 350～550 年）に最も地区間格差と地区内格差が明瞭に現れることを指摘し、この背景としては儀礼活動と経済活動の活発化があると推察し

た。

第5章の「メソアメリカの社会階層化」では、第2～4章までの各地域の社会階層化の過程とその背景についての個別事例をより相対化し、社会階層化からみたメソアメリカ古典期社会の形成過程と特質について論じている。すなわち、①階層間格差の二極化という現象に着目すると、メソアメリカ文明史においては紀元後200～300年頃に画期がみいだせること、②階層間格差の二極化という現象には地域差や時期差が存在し、また支配者層の戦略も異なること、③階層間格差の二極化はおこるが、単純な階層関係を想定するのではなく、各階層内部にも差異化が図られ、中間層や下位層の人々の存在を示唆する重層的な階層秩序があったこと、④権力資源論の視点からすると、先古典期は主にイデオロギー操作に偏向した支配者層像がうかがえ、古典期はそれぞれの社会的文化的背景に沿って、イデオロギーに加えて経済的側面や軍事的側面といった実態のある権力資源を有効に使い社会統合を達成していったより世俗的な支配者像を想起させること、⑤二重発展理論の視点からすると、共同的性格を強く指向するテオティワカンと独占的性格を強く指向するマヤ地域の大センターが併存する古典期は、メソアメリカ文明史においても特殊な時期であったことを指摘している。

つづく「第II部 周縁からみたメソアメリカ古典期社会の形成過程」では、主に筆者の現地考古学調査をもとに、いわゆる地理的文化的周縁と位置づけられるような社会が、先古典期から古典期にかけてどのように変化したのか、さらにその変化の特質について論じている。第I部の成果をうけて、メソアメリカ古典期社会の形成過程が多様である背景には、近年明らかとなりつつある周縁社会の独自性や主体性が深く関わっていると考えたからである。

まず、第II部の始まりである第6章「メソアメリカ周縁地域研究の現状と課題」では、メソアメリカ考古学研究における周縁地域研究の位置づけを明確にしている。次に、周縁という視点から先古典期から古典期への社会変化の様相を明らかにするために、メソアメリカ南東部に位置するチャルチュアパ遺跡を対象として、三つの論点を提示している。すなわち、1) 編年の再整備、2) 自然災害と社会変化の関係の解明、3) 周縁社会における社会変化とその特質の解明である。

第7章の「チャルチュアパの変遷過程」では、通時的研究の根幹となるチャルチュアパ遺跡の変遷過程を、建造物、炭素14年代、土器のデータをもちいて再構成している。分析の結果、これまで不明な点が多かった古典期前期の様相も含めた先古典期前期から後古典期後期に至る変遷過程を先行研究よりも具体的に復元し、つづく考古学的議論を可能にする時間軸を設定している。さらに、チャルチュアパにおける建築活動や土器伝統の連続性から、旧説でいわれているようなイロパンゴ火山の噴火による民族集団の交替をうながす

ような壊滅的影響は考えにくいとする主張を展開している。

第 8 章の「チャルチュアパにおける社会変化の画期」では、第 7 章で示した編年観に立脚した上で、先古典期から古典期への移行期にかけてチャルチュアパにおいて他地域同様に変化の画期がみられるか否かを検討している。建造物、石彫、土偶、土器の通時的变化を検討した結果、後 300～450 年ごろに各文化要素が連動して変化していること、支配者層の権力資源のうちイデオロギー的側面に急激な変化が生じていることを指摘した。さらに、墓制の分析結果から、先古典期後期には比較的平等性の高い社会を想起させる同列位相内の複数の異なる集団が存在する一方で、古典期には厚葬墓の存在から突出した階層上位者が出現したことを明らかにしている。

第 9 章の「チャルチュアパにおける外来要素の受容過程」では、先古典期から古典期への移行期にみられるテオティワカンをはじめとする外来要素の受容過程について考古学的手法と理化学的手法をもちいて論じている。まず、チャルチュアパの外来要素の出現時期や各文化要素の特徴について主に型式学的分析をおこない、さらに専門家の協力を得て、チャルチュアパ遺跡出土人骨を中心に、ストロンチウム安定同位体分析と歯冠計測分析を実施した。その結果、古典期前期にチャルチュアパにみられる外来要素は、在地集団が能動的かつ選択的に受容したものであると主張した。さらに先古典期と古典期にみられるチャルチュアパ内部の戦いの痕跡に着目し、周辺の有力センターが外部の影響を強く受けて変化していくなかで、そうした外部要素を二次的ではあるものの、能動的かつ選択的に受容した「新たな社会の再編成をもくろむ集団」によって、チャルチュアパ社会が変化していったという自説を展開している。

第 10 章の「メソアメリカ周縁地域の特質」では、第 7～9 章で論じたチャルチュアパの事例を総合的に検討し、「周縁社会の戦略」の存在を示し、メソアメリカ周縁地域の特質についてまとめている。すなわち、地理的文化的周縁と位置づけられるような社会でも、意志ある個人や集団が存在し、常に動的な存在として、社会活動の維持や強化のために独自の戦略を採用していたということである。チャルチュアパでは、周辺の大センターが盛衰を繰り返すなかで、周縁であることを積極的に利用し、質的量的に極度な肥大化や複雑化を指向せず、社会活動を維持しようとした巧みな生存戦略が存在することを想定した。ただし、上述した周縁社会の戦略の存在をより明確にするには、遺跡の立地特性、生業基盤、手工業生産と流通について検討する必要があることも明記している。

終章の「メソアメリカ古典期社会の形成過程」では、まず、社会階層化という観点からすると、古典期とは、各地で多様な道程を経て、複数の権力資源を操作する支配者層の主導により明瞭な階層秩序が形成され、地域によっては重層的な階層構造をもちつつも階層間格差が二極化する時期とする。そして、先古典期とは区別しメソアメリカ文明の政治史

的画期として位置づけられると筆者は評価する。さらに、古典期には複数の権力資源を組み合わせ、社会統合をめざす支配者層像が想定できるが、テオティワカンのように共同的性格を強く指向する戦略とマヤ地域の主たるセンターのように独占的性格を強く指向する戦略が併存する時期であることも、古典期の特徴のひとつであると述べている。そして、第 10 章で明らかとなった「周縁社会の戦略」の存在を想定する立場にたてば、メソアメリカ古典期社会の多様な形成過程の背景には、互いに共通する文化要素を有しながらも、ともに主体ある存在であった中心的な社会とその周縁社会を構成する集団間の様々なせめぎ合いがあったとまとめている。